

れんだりなつみ

1960年神奈川県生まれ。学習の好きな家庭で育てられ、高校時代に海事部に入部。小学校2年生から不登校に。高校卒業後は一時、社会人として就職。タクシードライバー→運送業員として働く。ラーメン店経営も経験。現在は、海上フリーステート→セントラル・パルススクール・コーディネーター。前回は4月号特集「ソーシャル・アート」実践主導団体スクールに内閣官房、JRでも実績あり。http://www.pulsecenter.jp/guest_editor/

【カラー】A4版 120頁 ￥1,400(税別) 著者: 梅田 夏絵
編集: ピースボート編集部 定価: ￥1,200(税別) 電話番号: 03-5774-1200(午前9時~午後5時)
FAX: 03-5774-2000(午前9時~午後5時)



グローバルスクールは、一般の人々が参加する通常のクルーズに同様に参加するかたちで開催されている。

一度崩れた自分への自信を、
小さな「村」の中で取り戻す。
ここは再出発に最適の場所なんです。



JAPAN'S
WISDOM

自分を変えたいと思った時、それを志す人同士が集まる場所があったなら、どんなに心強いことだろう。もしも、何とか復元して自信をなくしていくたり、社会に出られなくなっている時だとしたら、そのありがたみはなきものだ。

そんな出会いと実践的なコミュニケーションプログラム、約80日間の共同生活の中で提供してくれるのが「グローバルスクール」だ。これは不登校や引きこもりを産むつらうものではなく、人にはいろんな生き方があるのだから、その多样性が認められる。どうすることも感覚のためのスクールなのだと。そして心から向き合える仲間や出来事と出

ショットプログラムを、約80日間の共同生活の中で提供してくれるのが「グローバルスクール」だ。これは不登校や引きこもりを産むつらうものではなく、人にはいろんな生き方があるのだから、その多样性が認められる。どうすることも感覚のためのスクールなのだと。そして心から向き合える仲間や出来事と出

会い、今の生きづらさから解放された、それが新たな歩み踏み出していく……。そんなスクールが開催されるのは世界を廣く船の上、あの「ピースボート」の中だ。

引きこもりからリーダーへ。

このグローバルスクールの発起人のひとりが、ピースボートで制作部に所属する恩田夏絵さん。現在24歳で、「元引きこもり」として経験を持つ彼女だが、そもそもどうして引きこもりになってしまったのか。思ひ出しながら明るい笑顔で、外見も今は女性。しかし彼女の生き立ちや聞くと、義務教育にも半分しか行かなか

ったなどから驚きだ。

「私が学校に行かなくなつたのは、小

学2年生の時に『デザイナーになりたい』と思ったのがきっかけです。家にこもって絵を描くことを続けていたのですが、まわりの大人は甘えだとおもわれ、「自分の選択なんだと」という思いで、「きちんと学校に行かないと幸せになれない」と

言われる言葉との狭間で、揺れ動いていました」

そうして中学生になった時に、「卒業式」という場所をやめようと。中学生になったものの、そこで待つたのは恩田さんの仕事は、4月から始まる第3回のスクールに向けての準備。そこには、参加者の新しい人生の船出

が待つことだろ。

こからは昼夜逆転、朝食抜き、不眠、自傷行為などと心を離れて、完全「引きこもり」日々。もういやだと思つて、20歳になるまで「死のうと決めていました」。

20歳のカウントダウンが詰まり、死ぬか生きるかという選択を目前にした時、同時に彼女の中に芽生えたのは、もう少し自分の視野を広げてみたいという純粋な気持ちだった。そこで偶然見かけたピースボートの記事に興味を持ったが、今度は「死ぬか生きるか」という選択を目前にした時、同時に彼女の中に芽生えたのは、もう少し自分の視野を広げてみたいという純粋な気持ちだった。そこで偶

然見かけたピースボートの記事に興味を持ったが、今度は「死ぬか生きるか」という選択はすっかり消えいだ。

19歳でスタートとなり6年、恩田さんの中で芽生えたのは、自分の経験を生かした具体的なアクション「船」でした。どうした結果、ようして始まったのが、グローバルスクールの開校だ。スクールの第1回目の参加者は30人で、年齢は15歳から36歳まで。「わがめる引きこもりも私は、大会社の社長もいるという多様な人々が入り交じつた中で、恩田さんが感じたのかどうのないように見えなかった」とアマノさんは、「今は学校じゃなし会社でもない、年代や性別を超えて仲良くなれる人たいで、私にとっては日々をナチュラル通せる場所でした。上下関係がないから、ファミなんです」。

その時の乗船者は約800人で、年齢は10代から80代まで。自分のようないいところも、ひときわ目立つた。彼女は、社会のさまざまな人が入り交じつた中で、恩田さんが感じたのかどうのないように見えなかった」とアマノさんは、「今は学校じゃなし会社でもない、年代や性別を超えて仲良くなれる人たいで、私にとっては日々をナチュラル通せる場所でした。上下関係がないから、ファミなんです」。

船上で行われた運動会。200人のチームを率いる「アーチ」、自ら立候補した

のアーチ、私はその組の中で最も少しだ

のですが、それがキャラクターとして成

り立つたのも珍しくない。『船がどう

動かすの?』など、彼女のものに「若い

てくれたれるメンバーがいてくれた。まことにお互いの個性を生かして運動会をつく

り上げていくのが、とても楽しかった」。

この達成感を自信へと深めたのは、運

動会の翌日のこと。彼女のものに「若い

の力が強かったね」「あなたのおかげで楽し

かった」と、たくさんの言葉が寄せられた

のだから、体験が胸中を揺して、船を降

りてすぐピースボートのスタッフになる

ところは、同じくコミュニケーションを通

じて直していくしかない。人間同士の中

で再構築しなければ、根本的な解決に

はならないと私は思うんです。そのためには学校でも会社でもなく、「船」の上の

村」という場所をやめようとした。800

人、1,000人といろいろの社会の人々

が初めて開拓してきたのが、「じめは

ないのか」という質問。これは本当に

ますます「みんな自分で考えないと困

てるけれど」今まで何度も失敗してき

たから不安なわけです。でも、参加者は必

ず自分を取り戻して変わっていく。たと

えば友達ができるから船から離りたい

と言っていた人が、数日後には友達がで

き、今度は相手に離わざることを想像

して悩んでいます。「まだまだダイ

ちゃん(笑)」と思いつめますが、そ

うして確実に前进していく。「

グローバルスクールのプログラムの中

は、専門家によるヨガ・ケーションのた

めのワークショップも用意されている。し

かし、やはり大きいのが世界観の旅の參

加で、世界の多様性を目の当たりにする

こと。さらに共同生活を通して、「ヨガ

セッション」を毎日実践できるところ

も、この環境ならではだ。

「グローバルスクールで自信を取り戻せ

た人にとっては、それがまたまたこの船

の上であつたというだけ。他の場所で

もできなかもしれません。でも、この場

所でやり直すのに、また新しい

人生を歩むのです。

ソーンは、同じくコミュニケーションを通

Transit Drop Interview VOL.08

photographs: Hiroshi Takada, Utako Kameda, Shunya Mizumoto & PEACEBOAT

text: Miyo Nagata (ichigo)

ピースボート グローバルスクール・コーディネーター

恩田夏絵

引きこもりも、ひとつの個性。それを認め合いながら

コミュニケーション能力をリハビリする「グローバルスクール」。

元・引きこもりの経験を生かしてこのスクールを立ち上げた彼女は、同じ目線から、人同士が心から向かい合える「場」づくりを目指す。



4月24日出発のクルーズで、第3回のグローバルスクールが開催される予定。



1.一般的なクルーズには100席の人も参加するほど、船旅に楽しんでいます。2.ボランティアをするごとに参加費割引を受けることもできる。3.ヨコハマケーションに関するプログラムのはか、各種参加費とともに世界中のゲストによる様々なワークショップを開催している。4.運動会やアートショーケン等、イベントも盛りだらけ。5.プログラムのひとつには、和太鼓コンペも。船一首、音楽大きな空気の中で和太鼓は格別。

